

東京版

首都部
 千代田区有楽町2-3本社内
 (郵便番号 100)
 電 (212) 0044-5
 新宿分室
 新宿区角筈2-8-8新宿ビル
 (郵便番号 160)
 電 (343) 4631-6
 武蔵野支局
 武蔵野市西久保1-7-7
 (郵便番号 180)
 電 0422 545531
 京葉支局
 船橋市本中山2-1-18
 (郵便番号 273)
 電 0473 (35) 2141-3



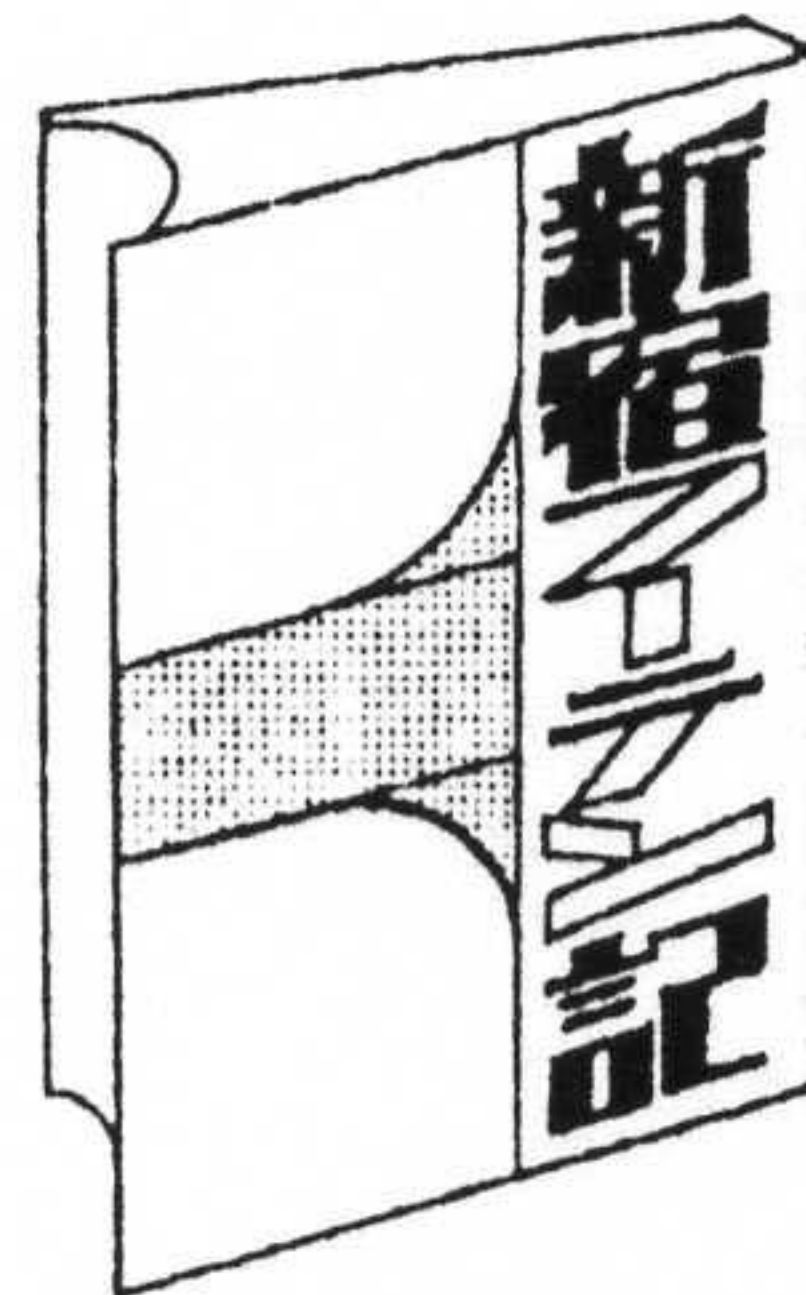
夕方、どこからともなくわき出て集団をつくる (歌舞伎町の井天公園で)

生きているシンナーは手にはいないのか、もっぱら、シンナーを溶剤にしたプラモデル用の液状接着剤が使われていた。一本約三十円。これを台所でよく見かける小さなポリ袋の底に移す。紙風船をふくらますために息を吹込んで吸う。隣の長髪を赤く染めた坊やが、私のポリ袋を取りあげた。が、一口吸ったとたんに変な顔をして、ペッペッとつばを吐いた。「なんだこれ」

接客剤にも甘口と辛口がある。フーテンの推奨銘柄は、あのメーカーに限られていることを、このとき初めて知った。彼に白濁したら、どこからか甘口のやつを買ってきてくれた。今度は恐る恐るやってみた。頭のとっぺんがシーンとなる。二本も吸うと舌がもつれ、足がふらつく。動作が緩慢になる。まぶたが重くなり、口もとがゆるむ。頭になかがつかめ込まれたような、自分の脳みそではなく、なつたような感覚になる。この気分を若者たちは「ラリル」という。

真夜中。パトロールの巡査が回ってきた。ほとんどはクモの子を散らすように逃げる。だが、ひとりのラリルた坊や、六人は腰をあげない。目のすわっているケタローなど、レロレロなゆっくりした口調でからむ。「シンナー吸ってえ、なんでえ、いけなんですかあね」

泣き上戸のマリエは、用もないのにやたらに仲間の子の名を呼び、見つけると抱きついておす。シンナーを吸った。のどの奥まで刺激が走った。むせた。激しくセキこんだ。ヒリッ、ヒリッ。口の中が、気管支が力ーッとするのがよくわかる。「おにいさん、あまりやったらとないんだね。ゆっくり吸うんだよ、ほら、こう、すこーしずつ」——日暮れ時の新宿駅東口。この夜も六、七十人の若者がどこからともなくわき出てきて、町のあちこちにたまり場をつくった。まるで蚊柱のように。歌舞伎町界隈にできた蚊柱の、一匹の蚊になつてみた。



①

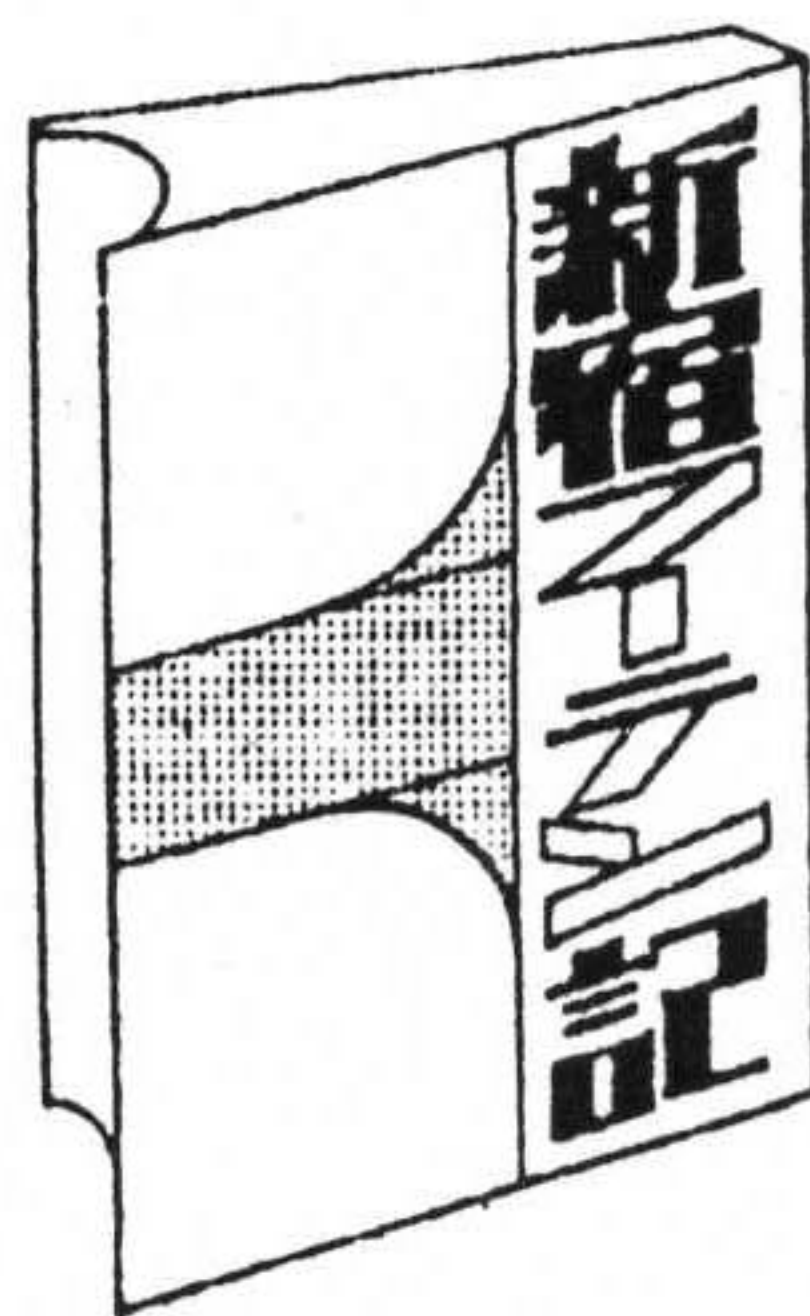
甘口と辛口

紙風船

ツは歩道の真中でキスをしたまま動かない。ビートは「ウォーッ」と、ありったけの声量だ。チケルは、息が鼻に抜けて、フガフガのことばだった。からみ上戸、笑い上戸、泣き上戸、だまり上戸。酔態は酒に酷似している。二日酔に似た症状もあった。私は翌日、すごい頭痛に悩まされた。鎮痛剤も全くきかなかった。後日、彼らにこの苦しさ話をすると、「シンナーを吸えばなおる」といわれた。迎え



耳をつんざくエレキ、強烈なビート。ゴーゴー喫茶に若者たちは引寄せられる (歌舞伎町で)



②

—男の子。

十六歳。秋田の農家の三男坊。小学生のとき、母に死に別

れた。これまで、なんど職をかえたかと、自分で思う。中学を出て、高校へ進学した

かった。集団就職で上京して新宿のラーメン屋でコック見習いになる。長くは続かない。長距離トラックの助手、鉄工場、ビール工場と転々とした。

—女の子。

十六歳。山形県の山村に牛れた。父は出かせぎで、家をあけることが多かった。去年の春、中学を出てから東京へ出てお手伝いさんになった。「奥さんが

工場は「三交代制で、きつかった。集団就職で上京して新宿のラーメン屋でコック見習いになる。長くは続かない。長距離トラックの助手、鉄工場、ビール工場と転々とした。ラーメン屋をもちめたのは「仕事が多すぎたから」

なまいきだった。すぐ飛出して、こんどは住込み店員として洋品店へ。月給一万余円。あほらしくて、わずか三カ月で喫茶店のウェイトレスに。

「マスコミ遊び」というのがある。去年の夏以来、フーテンがジャーナリズムに取上げられ、そこで覚えたかせぎの手口だ。取材に必じるかわり、カネをせびる。目の前でカメラを向けようものなら、モデル料を請求される。「肖像権あるの、知らねえのかよ」と、すこまれることもある。

フーテンに仲間入りして、はじめて友だちを持った。

彼女の感嘆「自分の存在を認めてもらえるの、ここだけみたい」

去年、フーテンで東京少年鑑別所に送られた者から無作為に五十人を抽出した身元調査結果は

日かげ育ち

履歴書

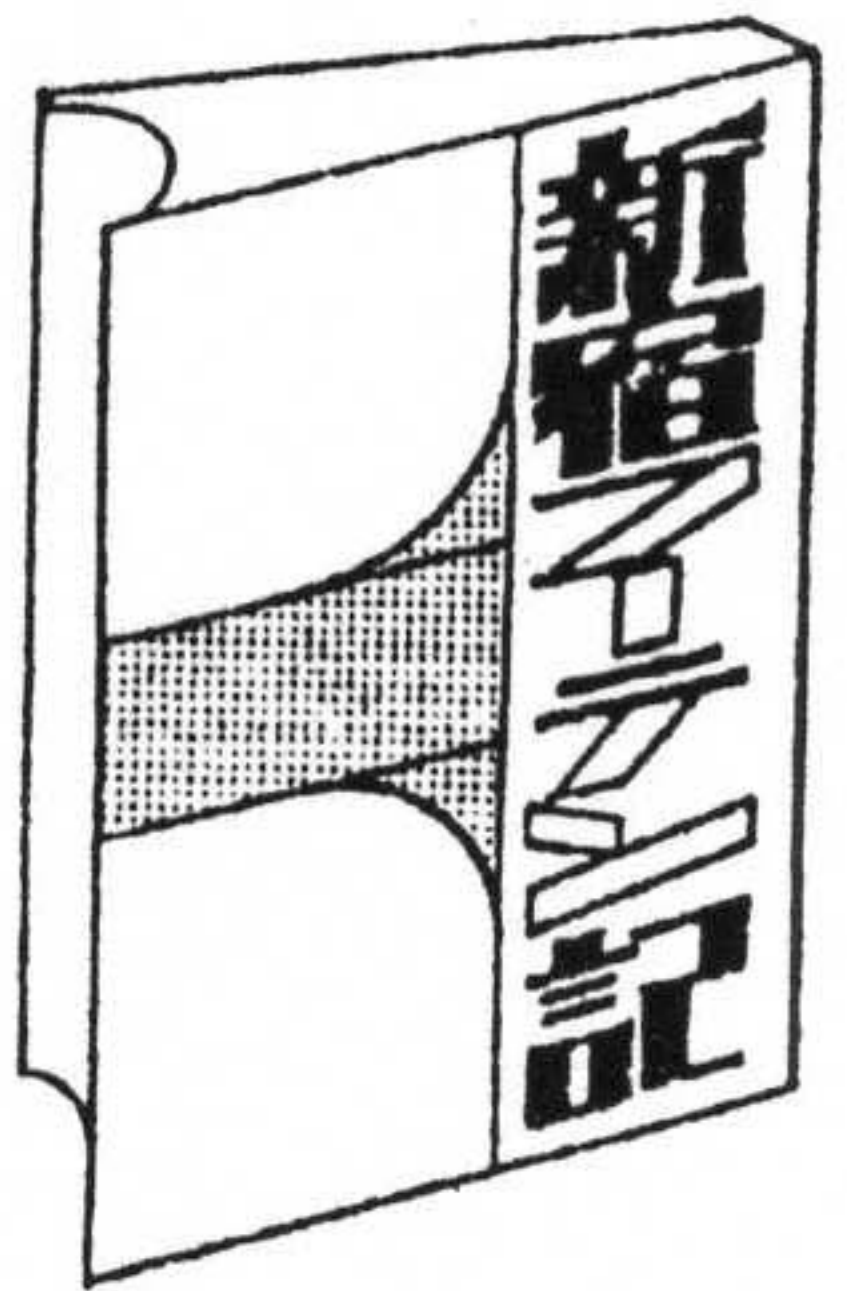
するとき「おれ、週刊誌に写真もでたんだぞ」と自をかがやかせた。ポケットから、くしゃくしゃになった記事を得意げに広げて見せるのだった。

これまで、とかく、日かげばかり歩いてきた少年少女たちにとって、雑誌への登場は、生れて初めてのまぶしい光なのかもしれない。(大淵一夫記者)

- △出身地▽東京 四〇%。その他、全国まんべんなく。
- △家庭▽両親がそろっていない 六〇%。
- △家の暮らし▽中流 七二%。
- △学歴▽中卒以下 七二%。
- △職業▽単純労働者から水商売への道をたどった者 四六

「マスコミ遊び」というのがある。去年の夏以来、フーテンがジャーナリズムに取上げられ、そこで覚えたかせぎの手口だ。取材に必じるかわり、カネをせびる。目の前でカメラを向けようものなら、モデル料を請求される。「肖像権あるの、知らねえのかよ」と、すこまれることもある。

なにもフーテンの中には、自分が登場した女性週刊誌を大事そうに持っている者がいた。たとえば、フーテン入りして最初に知合ったキンシ。彼は自己紹介



③

警視庁石川保安二課長の話

「新宿駅西口にはベ平連がお

ります。東口でフー

テンたちがベ平連の

まねごとでもしたら

エラいことになりま

すからね。去年の

秋、フーテンに東口

交番を焼打ちされた

ことだし、この夏

は、フーテンの反抗

性を徹底的に調べて

みました。結果は、

シンナー吸ってる連

中に、思想的、攻撃

的な要素は何も見つ

けることができませんでした」

◇

フーテン集団は、多いときには百人近くになる。まとまれば、警視庁の恐れるパワーになりかねない。しかし、これに号令をかける者は、ついに見けなかった。リーダーがいるという話だったが、それらしい男は

のびる黒い手

無気力集団

いない。互いの名前もよく覚えていない。毎晩顔を合わせてる仲なのに、握手しながら「君、名前なんていったっけ」などとやっている。ある晩、ムギワラ嶺、海水着を持った者が自立った。いかにも、フーテンの大移動が起りそうな雲行きであった。「江の島へでも泳ぎに行くの」と聞いた。「さー、みんなが行くなら行こうかな」という。

結局、行かずに終わった。

ラリったケタローが、レロレロになって警察官にからんだことは、すでに書いた。が、ケタローのけんか好きは例外に属する。あれほどシンナーに酔った男が大勢あつまったら、毎晩三件や四件、血の雨が降ってよさそうに見える。ケンカは倍じら

れないほど少なかった。こんな無気力な集団に、やさしい声で近付いてくる一群の人間がいる。

ある晩のこと。

「そんなにシンナー吸って

からた悪人啊。どうしてな

いからな。働かなくて、まっとうな人間になれないじゃないか。しよがらないだろ、こんな風船みたいなものじゃぶったって」

銀行入口の石段に腰をおろしたミキエは、そっぽを向いたまま、フカフカやっていた。言葉づきからみて育ちはよくないが、目がクリッとしている。長い足にパンタロンが似合う。開きんシャツの中年男は、顔をのぞき込むようにして、ネコなで声で説得する。

「シンナーはやめなつて。

な。ちゃんと働いてみなさい。

おれ、Aのママによく話

しといたからね。ママはいい

人だよ。まじめに働けよな。フー

テンなんかやって家の人を知つ

たら悲しむよ。シンナーはから

だをこわすし。更生しなさい」

「やだつたら、やだよ」

「お前がフーテンやってるつ

て家の人にいつけるよ。お前

の家どこだか、ちゃんと聞いて

あるんだ」

「うそだよ。だれも知らない

くせにでたらめいって……」

隣にいたミコ坊に「あの補導

員みたいなおじさんはだれ」と

聞いた

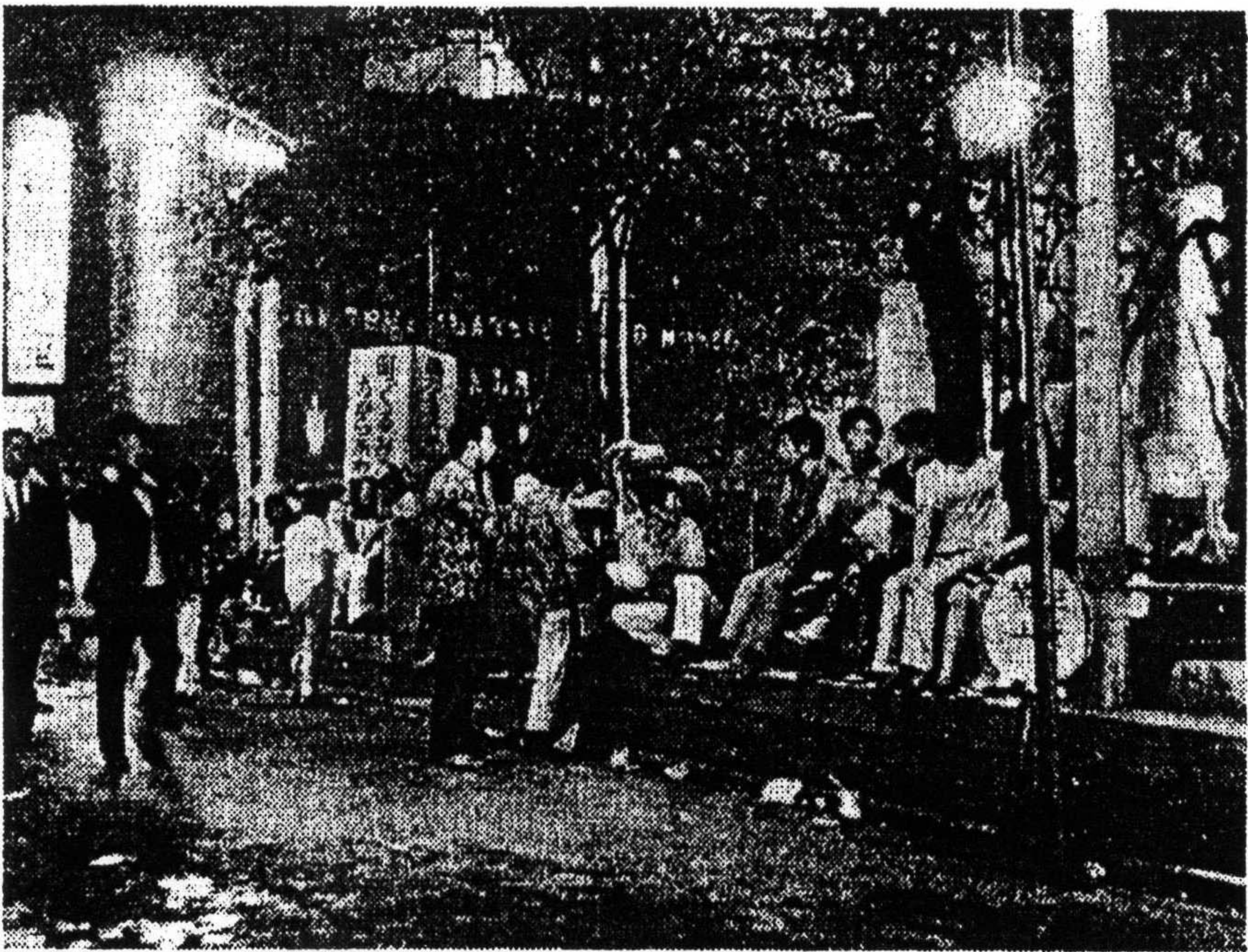
「ヤーさん(暴力団員)だよ」

フーテンの町、歌舞伎町で

は、ヤクザが、最も、道徳的、

なことをいう。

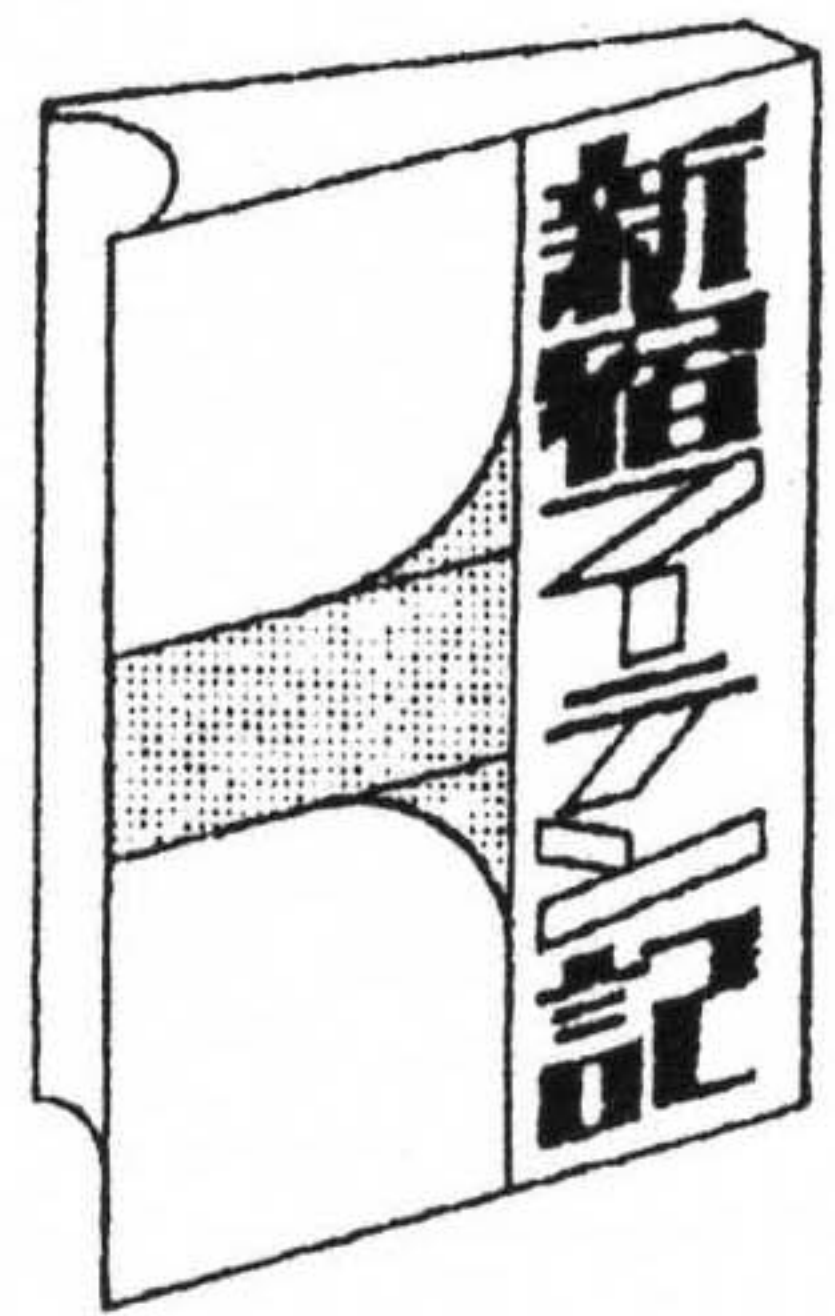
(大瀬 一夫記者)



かれらに暴力団だけがやさしい声をかける(歌舞伎町井天公園で)



(大熊 一夫記者)



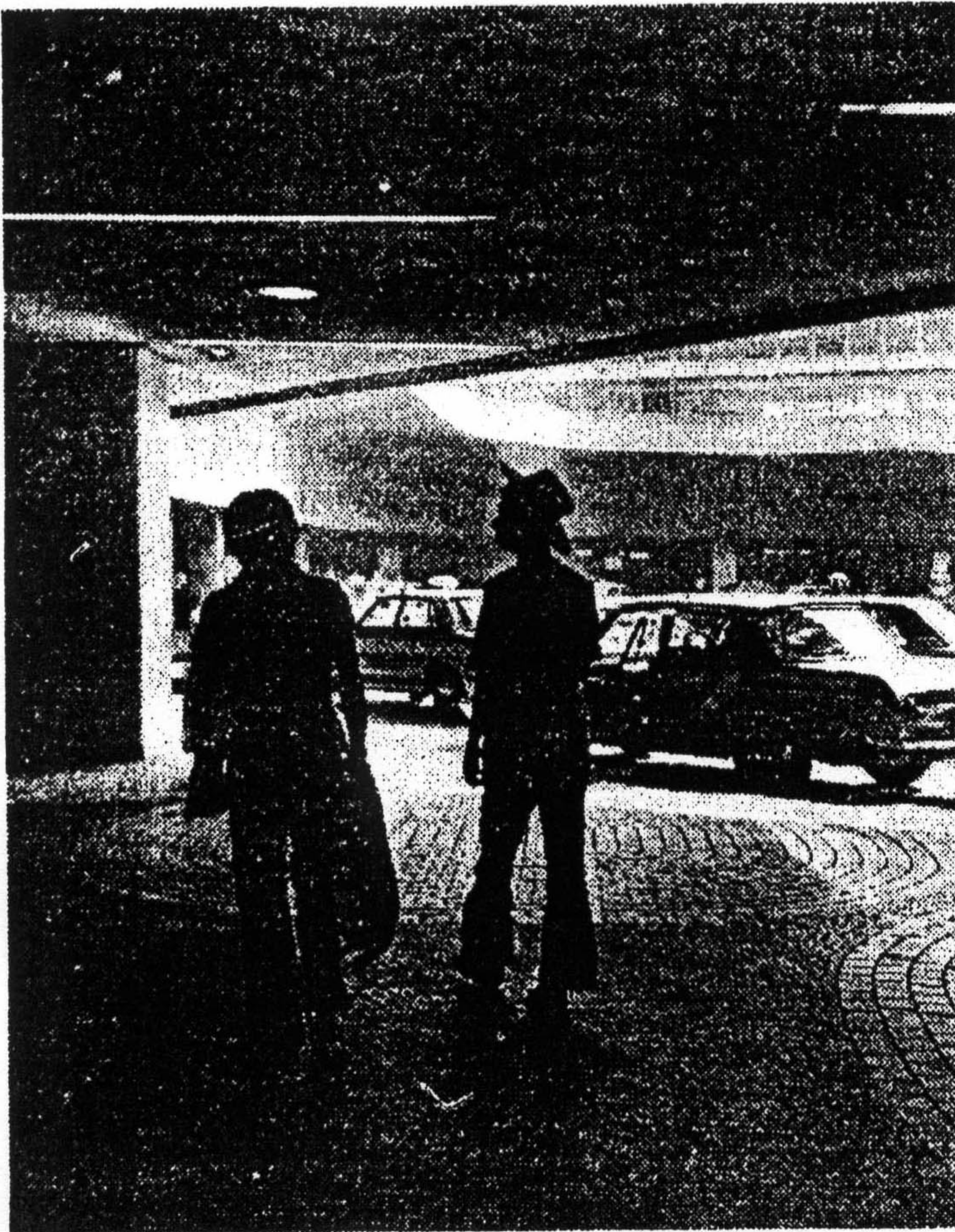
(5)

フーテン・チー坊のある日の
喫茶店でコーヒー
アンパンなど三個
七十四円
六十円

喫茶店でコーヒー	八十円
カレーライス	七十円
冷しスイカ	五十円
アイスクリーム	十円
接骨剤九本	九百円
ラーメン	八十円
焼トウモロコシ	百円
タバコ	六十円
計千四百八十円	

この費用の大部分は、通行人
のキャンパでまかなわれる。

◇
チー坊の唇間のかせぎ場は駅
構内のコインロッカーと赤電話
と乗車券自動販売機のまわりだ
った。主に女性がねらわれる。ガ
マロや財布を取出しているとき
ろを両手をいれずに切出す。き
のうからなにも食べてないんだ
けどキャンパして……。せりふは



道化師のようなシルエット (西口地下道で)

こじきた。この無心を一時間も
続けると、十円玉の中に百円玉
がチラホラまじる程度になる。
女性というものは、現金を出し
ているところを見られると、す
げなく断れないらしい。とく
に若い女性の二人連れが、奇妙
に、フーテンに、弱かった。

「近付いても警戒しないし、
片方が出ると、もう一方も強合
つて出す。キャンパし
て、の代りにゴーゴ
ーにいかない、とい
っていいんだ」。

ぐーたらのかせ
に、こんなところだ
けは抜け目ない。ア
メリカ兵もしばし
ば、カモにされてい
た。新宿をよく知ら
ないのだから。なに
かにうえたような目
をして、歌舞伎町を
二周も三周もしている。彼らは
フーテンをニューヨークのヒッ
ピーと同じように、一つの哲学
を持った集団と勘違いしてい
る。フーテンのたまりに寄って
きたところを「ウィーアー
ジャパニーズ ヒッピー(オレ
たちは日本のヒッピーだ)」な
どとペテンにかけて千円札をせ
しめるのだ。少年の目つきは戦

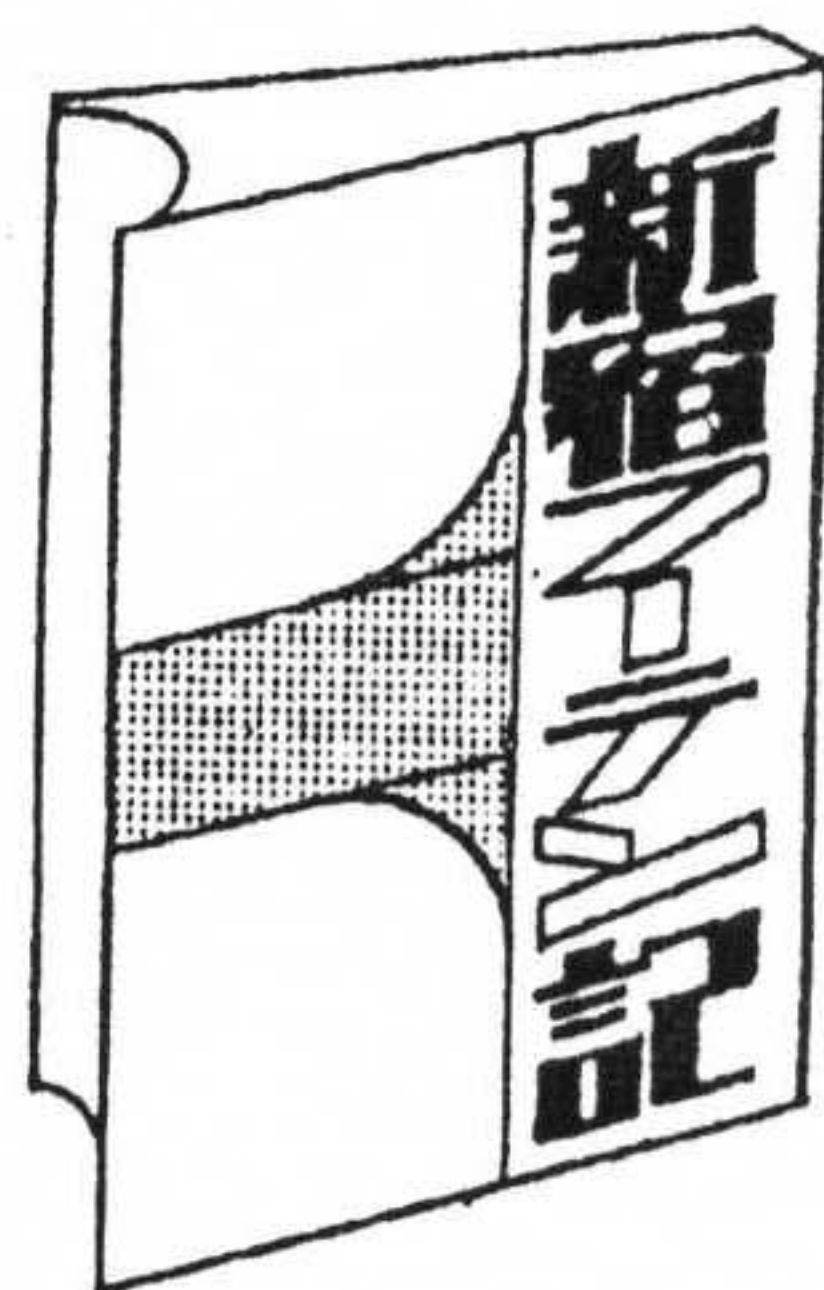
風俗市場

ピエロ

後、進駐軍にチューインガムを
ねだったクツミがさを思わせ
た。

◇
フーテンは新宿を食いものに
しているつもりでいる。しかし
彼らのキャンパ総額は、たかが知
れている。これに対して、フー
テンによる新宿の観光宣伝効果
は、ひと夏、一億円を下らな
いといわれる。これ
はと思つたフーテン
の衣装をみつけた
い、カメラにおさめ
寸法までとつて、
新しいトップモー
ドをつくるデザイナ
ーがいると聞いた。
服装を観察して商品
化し、専門コーナ
ーまで設けてフーテ
ン風俗を演出したデパ
ートもある。フーテ
ンこそ、大都会の欲望に踊らさ
れたピエロ、といえないか。

ある晩、駅東口・馬水橋前で
聞いた中年男の脱教話
「お前たち、マンガだな。見
せものにされてよ。女の腐った
ようなかつこうして恥ずかしく
ないの。オチンチンあるんだろ
う。軍隊で性根をたたきおし
てやりてえな」(大瀬一夫記者)



⑥

日暮れとき、ボンド屋のおじさんは、いま流行のセーラーバックを肩に現れる。色あさ黒く、はげあがっている。フーテンの少年少女とは親子ほどに年がちがう。

この夏は、フーテン全賣がシンナーのとりこになった。フー

テン姿では、プラモデル屋も接替剤を売ってくれない。この世界で、おじさんほど、みんなと強いつながりを持つ人間はいない。接替剤の売買は、コソコソと進められていた。

バックから数本をスポンの右ポケットに、左にポリ袋をつめ込む。警察官の目を避けて、バックは人目のつかないところへ隠す。あとは人たまりの中をうろつけばいい。買手は近付いて百円玉を出す。おじさんは周囲をキョロキョロ気にしながら、

下の方で、すばやく手渡す。テレビ映画でみる、あの麻薬の取引そっくりの情景が、町の真中で現実には展開される。接替剤は小売値が一本五十円、百円で売れば、六十人が平均二本吸って六千円、三本吸えば九千円がもろになる。

鬼ごっこ

マッポちゃん

午前二時すぎ。そわそわ落付かない者がふえる。接替剤を賣えない文無し組だ。タバコ飲みがタバコを断たれたような鬱断症状を見せはじめ。だれかがトラの子の一本をポケットから取出すものなら「一回だけでいい。吸わせ」とねだってくる。二人集り、三人集り、いさかいが起る。一ピンをウリカンで買者もいる。

「そっちのが多い」「よこせよ」「最後の一滴くれよ」「あ

ーあ、カネがほしいなあ」ボンド屋のおじさんは二ピン百円を三度に亘り上げる。ニコニコしながら「はい、毎度ありがとうございます」

フーテンの衣装をニューモードに利用するデザイナーの話は前回紹介した。このおじさんはフーテンの生き血を汚して生きている。

道路わきに腰をおろしていたら、突然、だれかにポリ袋を激しくはたき落された。

「バカヤロー、何度いったらわかるんだ」

けれど、だれかが「マッポだぞー」と叫べば、あつという間にポリ袋はシャツの下やポケットに隠されてしまう。オニごっこを演じようなどあるがある。警察官だって「通行のじゃまだぞ」と追い散らすだけのことが多い。姿が消えれば、シンナーの裏が再購される。ボンド屋のおじさんが、また、どこからともなく現れてくるのだった。

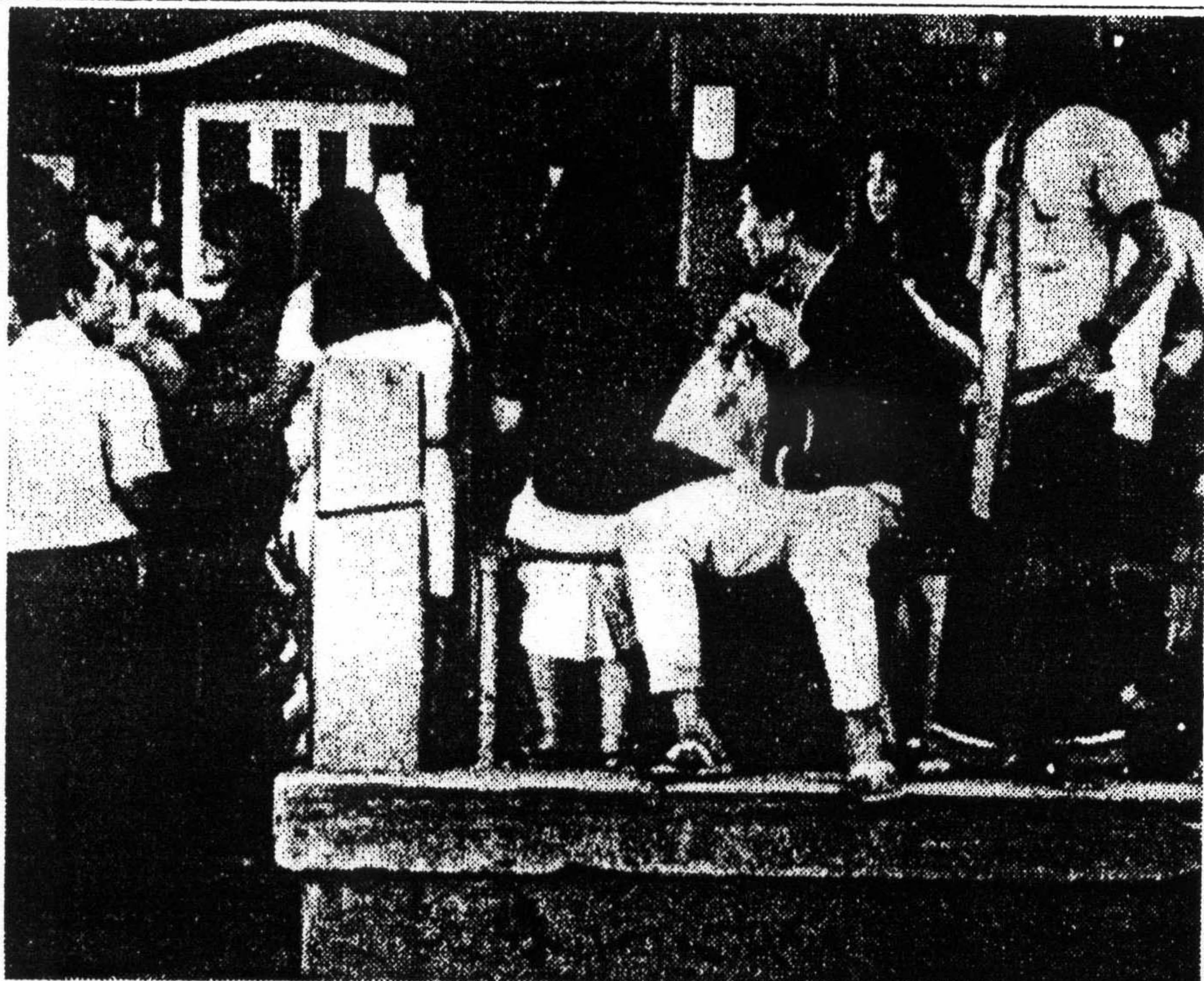
広場か通路か——世論がわかれている西口広場で警察は数千人の機動隊を出動させてフォーク集会を締出した。フーテンの風船遊びについては、世論はわかれていない。だれもが、やめさせたいと考えている。七月末、警視庁はフーテン延べ五百四十六人を保護、拘捕したと発表した。その時点で、シンナーの裏は相変わらず盛況。ボンド屋のおじさんも大繁盛だった。たかだか百人足らずのフーテンなのに根こそぎ保護されたことも、拘捕されたこともなかった。

フーテン自身にしても、心の中ではやめたいと思っている。フーテンばかり集るゴーゴー喫茶のトイレの壁の落書きは、こんな叫びでいっぱいだった。

「ボンドやめろ」「シンナー吸うな」「やめさせて……」

(大熊一夫記者)

おわり



ボンド屋——フーテンと最も強く結ばれた男(左に立っている)——歌舞伎町井大公園で